

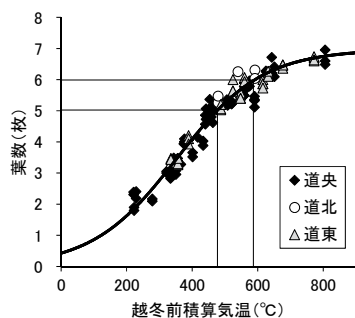


図1 越冬前積算気温と主茎葉数の関係

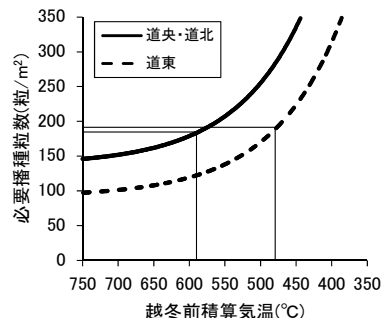


図2 越冬前積算気温と必要播種粒数の関係

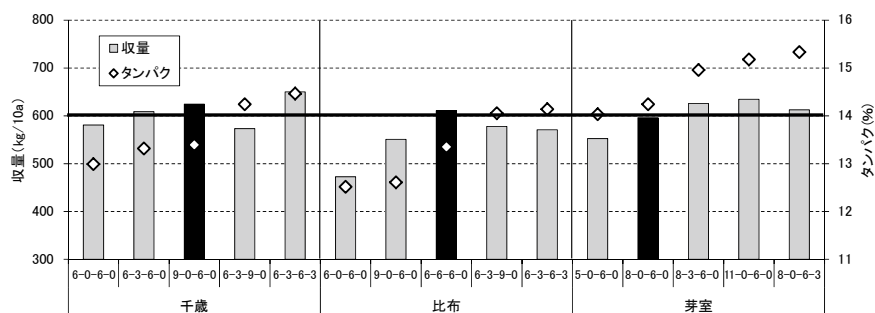


図3 窒素施肥が収量・タンパクに及ぼす影響（2012～2014年平均）

注1) 処理区は起生期以降の窒素施肥体系（起生－幼形－止葉－開花 kg/10a）。
注2) 芽室は2013、2014年平均
注3) 黒の棒グラフは各地域の標準窒素施肥体系を、横の実線は収量・タンパクの目標値を示す。

表1 「ゆめちから」の栽培目標および栽培体系

栽培目標		備考
項目	目標値	
タンパク	14.0%	13.0～15.5%の範囲を逸脱しないこと
収量	600kg/10a	570～640kg/10a程度の収量が期待できる
成熟期窒素吸収量	17.3kg/10a	目標収量、タンパクの確保に重要
穂数	道央・道北：580本/㎡	目標とする越冬前茎数1500本/㎡、起生期茎数1300本/㎡
	道東：530本/㎡	目標とする越冬前茎数1000本/㎡、起生期茎数1200本/㎡
栽培体系		備考
項目	実施方法	
播種期	越冬前の主茎葉数が道央・道北6葉以上、 道東5葉以上となる時期 越冬前積算気温では道央・道北590℃以上、 道東480℃以上	1. 越冬前積算気温は、11月15日を起日とした日平均気温3℃を超えた日を遡って積算する（平年値）。 2. 播種適期は「きたほなみ」より早い。晩播によって収量は低下し、雪腐病の被害も高まることから、適期播種を励行する。 3. 極端な早まきは倒伏リスクを高める。
播種量	適期に180～200粒/㎡（発芽率90%と仮定）	1. やむを得ず播種が遅れた場合は、播種量を増やすことで減収を緩和できる。
窒素施肥法	標準窒素施肥体系 （起生－幼形－止葉 kg/10a） 道央：9－0－6 道北：6－6－6 道東：8－0－6	1. 基肥は4kg/10aを上限とする。 2. 当該圃場または近隣圃場における「ゆめちから」の過去実績データが存在する場合は、窒素施肥シミュレートツールNDASにより窒素施肥体系を調節できる。 3. 泥炭土を除き、止葉期葉色が道央・道北で45未満、道東で49未満の場合は、タンパク13%を下回る可能性が高いため、止葉期増肥や開花期葉面散布を行う。また、止葉期葉色が道東で53以上の場合はタンパク15.5%を上回る可能性が高いため、止葉期の減肥を行う。増減肥の目安は窒素施肥量3kg/10aにつきタンパクがおよそ1ポイント変動するとして行う。
その他	1. 有効気温（日平均気温－基準温度、ただし正の値）の積算値を用いて、出穂期および成熟期を予測できる（誤差は2日程度）。融雪日～出穂期の有効積算気温および基準温度はそれぞれ523.9℃、0.66℃、出穂期～成熟期ではそれぞれ621.2℃、3.69℃である。 2. 一日あたりの穂水分低下率の平均は、成熟期前1.38ポイント/日、成熟期後3.69ポイント/日で、「きたほなみ」（同1.55、4.56ポイント/日）より低下程度がやや小さい。 3. 標準窒素施肥体系に従った上での黄化は施肥以外の要因（土壌物理性不良、低pH、病害等）の可能性が高く、黄化対策としての安易な窒素追肥はタンパクを過度に高める恐れがある。	

詳しい内容については、次にお問い合わせ下さい。

道総研十勝農業試験場 生産環境グループ

電話（0155）62－2431 E-mail：tokachi-agri@hro.or.jp